お客様が不在の為お荷物を持ち帰りました。

It's dangerous
if you don't receive
your luggage.

鞠目

Marime

ALPHAPOLIS
アルファポリス

Contents

序章　奇妙な問い合わせ……003
第一章　不運な男……009
第二章　迷惑メール……029
閑話　さくら配達・喫煙室……081
第三章　オカルト掲示板……087
第四章　ある配達員の話……121
第五章　バイトの先輩の話……199
終章　残された者たち……241

序章

奇妙な問い合わせ

It's dangerous if you don't receive your luggage.

ある女性社員が受けた電話での問い合わせ

「お電話いただき誠にありがとうございます。さくら配達株式会社S営業所、矢吹(やぶき)でございます」
「あの、すみません、お尋ねしたいんですが、御社の配達員の方で最近いたずらのクレームを受けた方はいらっしゃいませんか？」
「いたずらのクレーム……ですか？　いえ、そのような報告は上がっておりませんが、弊社の配達員のことで、なにかございましたでしょうか？」
「えっと、なにかあったというか……インターフォンを三回鳴らされた後、ノックを三回。それから、『さくら配達です、さくら配達です、さくら配達です』ってドアの向こうから大声で三回も言われたんです」
「それは大変申し訳ございませんでした。どのような配達員だったか、お教えいただけますでしょうか？」
「それが、見てないんです」
「見ていない……ですか？」
「いや、覗き穴で外を確認したんですよ。気持ち悪いけど、どんな人が来たのか見たほうがいいと思って。でも、すぐ見たはずなのにドアの外に誰もいなかったんです」
「なるほど、配達員の姿はなかった、ということですね」

「そうなんです。念のためチェーンをかけたままドアを開けて確認したけど、やっぱり誰もいなくて……」
「そうでしたか。今のところ、お話を伺っただけですのでなんとも申し上げにくいのですが……弊社配達員を装ったいたずらの可能性とも考えられるのですが、いかがでしょうか？」
「そうですよね、私もそうかなとも思ってるんです。ただ、その人が来る前にポストに入ってたんですよ……さくら配達さんの不在配達の紙が」
「弊社の不在票がポストに投函されていたんですね？」
「はい。あと不在メールみたいなのも届いてて、個人のいたずらにしては手が込んでるな、と。それで、もしかしたら配達員の人がこういうことをしてて、他にも被害に遭った人がいるんじゃないかと思ったんです」
「左様でございましたか。そうしましたら至急営業所内で確認させていただきます。恐れ入りますが、不在票に配達員の名前が記載されていましたら、お教えいただけますでしょうか？　また、念のため伝票番号と、お客様のご住所をお伺いできますでしょうか？　確認でき次第、改めてご連絡させていただきたく思います」
「あ、いや、いいんです。私が原因かもしれないんで……」
「原因と言いますと、なにかお心当たりがあるのでしょうか？」
「え？　あ……いえ、気にしないでください。すみません変なことで電話して。確認とかは大丈夫です。失礼します」
「あ、お客様……」

受話器越しに電話が切れる音がする。一方的に電話を切られてしまった。
まただ。また、この電話。
インターフォン、ノック、それから「さくら配達です」の呼びかけ三回。
多少内容に違いはあるけれど、そんな問い合わせがここ数カ月、週に二、三件かかってくる。
「もしかして、また？」
溜め息を吐いていると、後ろから先輩の声がした。振り向くと、怪訝そうな顔をした二つ上の先輩がお財布片手に立っていた。
「はい、あの『三回』の問い合わせです」
返答すると、先輩の顔が曇る。
「やっぱり……私も先週対応したんだよね」
「そうだったんですか。最初はいたずら電話かと思ったけど、問い合わせは毎回違う人からだし、年齢もばらばら。なんだか気持ち悪いですよね」
正体不明の偽配達員。

心霊現象とかではないと思う。だけど、真相がわからないことが不気味さを漂わせている。心霊系は苦手だけど、こういう人間絡みの不穏な案件も不得手だ。
「ね、なんか気持ち悪いから本当に勘弁してほしい……まあ、それより、十二時だしランチ行こうよ」
「そうですね。今日はなににします？」
「んー、昨日はサンドイッチだったし、パスタはどう？」
「ありですね！」
バッグから財布を取り出して席を立つ。その時、後ろの席から「インターフォンが三回鳴らされたとのことですが……」と電話口に話しかける女性スタッフの声が聞こえた。
一瞬、足が止まりかけたけど、私は聞かなかったことにして先輩の後を追った。

第一章

不運な男

It's dangerous if you don't receive your luggage.

不運な日というものは、なにをやっても不運なのだろう。今日は朝から運がなかった。まず雨。朝起きたら腰が痛かった。

大学時代、引っ越しのアルバイトをしていた時に腰を痛めてからというもの、雨の日は腰が痛む。鈍く重たい痛みが体に張り付き、動きを阻害する。おれは寝起き早々嫌な気分になった。

腰をさすりながら起き上がり、ベッドボードに置いた小さなデジタル時計を確認する。

そこでおれは愕然とした。

七時半。出勤時間を考えると、もう家を出ないといけない時間だ。

「やっべぇ……」

寝起きの頭が秒で覚醒し、大慌てでシャツに着替えて出勤準備に取りかかった。

散らかった部屋の中、床に落ちた配達の不在票を踏んで足を取られる。自分が落としたのが悪いとわかってはいるけど思わず舌打ちをする。宛名に乱暴な筆跡で『間宮』と書かれた不在票を拾い上げると、ノールックでゴミ箱に投げ捨てた。

一度もアイロンをかけたことがないくしゃくしゃのシャツと、少し汚れが目立ちはじめたスラックスを身につけ、おれは家を飛び出した。

最寄り駅まで傘を差しながら全力で駆け抜ける。地面を蹴るたびに跳ね上がる水滴がスラックスの裾を濡らす。ああ、気持ち悪い。

駅まで歩いて十五分の道のりを、なんとか八分で移動する。二十代の頃はそれほど苦もなく走れた距離が、三十を超えた頃から足が重たくなり、三十五歳の今では駅についてもなかなか息が整わなくなった。高校時代、陸上部で磨きをかけた走りは見る影もなく、代わりに存在感を示すのはベルトの上に乗った贅肉だけだ。

なんとか遅刻せずに済む時間の電車に駆け込み、一安心する。しかし、それも束の間。嫌な予感が頭を過った。スラックスのポケットからスマートフォンを取り出し、それが予感ではなく現実であることに気づく。スマートフォンの充電が切れていた。寝る前に充電をしたつもりが、充電器に繋ぐ前に寝落ちしていたらしい。モバイルバッテリーも持っていない。どこかで買えるだろうか。扱いが悪いせいで傷が目立つ腕時計を見る。会社につくのは、始業時間ギリギリになるだろう。

「まあ、会社につくまでの辛抱か……」

車窓から見える景色がゆっくりと動き出すのを眺めながら、自分に言い聞かせるように独り言を呟いた時だった。

けたたましい警報音が車内に響き、電車が急ブレーキをかけた。
『お客様にお知らせいたします。危険を知らせる信号を受信したため、緊急停止いたしました。ただいま状況の確認を行っております。しばらくお待ちください』
舌打ちが出た。我慢するとかそんな選択肢なんてなく、気がついた時には舌が勝手に動いていた。その直後、無数の鋭い視線がおれを突き刺す。
わざとじゃないのにと思いつつ、居心地の悪さにうつむくしかなかった。

「間宮、お前は何度言ったらわかるんだ！」
四十分の遅刻。新卒で入った小さな広告代理店に出社して早々、課長にデスクまで呼び出されて怒鳴り散らされた。説教の内容は多岐にわたる。
無断での遅刻から始まり、おれが先日提出した資料の不備、顧客からのクレーム、それからプリンターの不具合のことまで。
資料の不備は課長が「あとはおれが入力しておくな！」と言って取り上げたくせに、自分が入力し忘れていただけだ。そもそもあれはおれの仕事じゃない。課長が作らないといけない資料だったのに、面倒だからとおれに押し付けてきたやつだ。
顧客からのクレームは、課長が気に入っている若い女性社員の言葉遣いが悪いことが原因だし、プリンターの不具合もエラーが出ているのに無理やり使おうとして余計な操作をした、目の前の馬鹿のせいだ。
「なんだ？　不服そうな顔だが、文句でもあるのか？」
どうやら顔に出ていたらしい。文句しかないけれど、上層部に媚を売りまくって気に入られている課長に逆らうのは得策ではない。おれは不満が爆発しそうになるのをなんとか我慢して「ご迷惑をおかけして申し訳ございませんでした」とだけ口にした。
「わかればいいんだ、わかれば。今後はもっとちゃんとしてくれよ？」
課長はそう言っておれの肩を軽く叩くと席を離れていった。

課長に叱られた後も散々だった。課長お気に入りの女性社員へクレームを入れてきたクライアントに謝罪に行き、帰社後はまた課長に仕事を押し付けられた。全く仕事をせずスマートフォンをいじるだけの課長を横目に、どうしてこんな奴が課長なのかと沸々と不満が湧き上がる。すると、「おれ、ちょっと外出するからさ、これもよろしく」と課長がさらに仕事を押し付けてきた。
同じ部署の同僚たちは憐れみの目でおれを一瞥するが、巻き込まれないようにするため我関せずの態度をとる。課長は過去に何度もパワハラ、セクハラで人事部に通報されていたが、それをことごとく上の力を使って揉み消している。残念ながら、課長に目をつけられたら諦めるか会社を辞めるしか方法がないのが現状だ。

どうして課長が上層部とそんな密な関係なのかは誰も知らない。過去に調べようとした人がなにも言わず突然退職したので、踏み込んではいけない領域なのだと部署の暗黙の了解となっている。

十九時。押し付けられた業務をなんとかこなし、オフィスを出た。最近、会社は残業に厳しい。

基本給が安く残業代をあてにした生活をしていたので、ここのところ少し懐(ふところ)が寂しく、寄り道をせずに帰宅する。我が家である賃貸マンションが見えてきた時、建物の前に運送会社のトラックが見えた。そうだ、今日は通販で買った鹿児島の芋焼酎が届く日だ。

月に一本、通販で焼酎を買っている。ちょっといい値段のものを買って、自分へのご褒美にしているのだ。トラックの運転席から運転手が降り、荷台から荷物を下ろす姿が見える。時間とサイズ的に、あれはおれが買った焼酎だろう。

配達員がマンションに入るのを見て、おれは歩く足を止める。

今、少し早歩きをすればきっと荷物を受け取ることができるだろう。でも、おれはあえてそれをしない。

もちろん配達員に対して申し訳ないと思う気持ちもゼロではない。でも、指定された時間に届けに行っても不在という状況に苛立っている配達員を見ると、「ああ、理不尽なことでストレスを抱えているのはおれだけじゃない」という謎の満足感が得られる。

最初は、そんなつもりではなかった。

先月だったか、たまたま電車の遅延で帰りが遅くなった日に、すんでのところで荷物を受け取ることができなかった。その日の荷物がなんだったかは覚えていないけど、顔を曇(くも)らせてトラックに戻る配達員の表情を見たおれは、胸がときめいてしまった。

それからだ。ストレスが溜まった日に配達が重なると、おれはわざと荷物を受け取らずに持ち帰らせるようになった。帰宅が配達予定時間に間に合ってしまいそうな日は、わざわざ寄り道までして時間を潰した。

こんなことを楽しむなんて、自分でもやばい性格だと思う。なのに、やめられずに何度も繰り返している。理由はあまり認めたくはないが、荷物を持ってすごすごと引き返す配達員を見下すような、謎の優越感にハマってしまったのだろう。

でも、そろそろ潮時な気もしている。

最近、配達員が引き返した直後に、別の変な配達員が来るようになったのだ。

■■■-□□□□

初めは、見間違いかと思った。

その日もおれは、わざと荷物を受け取らなかった。仕事帰り、おれの不在に毒づきながら帰る配達員をマンションのそばで見送り、おれは意気揚々と自分の家へ向かった。

そして三階まで階段で上がると、運送会社の制服を着た男が家のドアの前にいるのが見えた。

その姿を見た瞬間、おれは即座に壁際に隠れた。

あの配達員とは、まだ十メートル以上距離がある。気づかれた様子もない。そもそも隠れる必要なんてない。だが罪悪感のせいか、咄嗟に体が動いていた。

配達員にバレないよう、こっそり様子をうかがう。ドアの前にいるのは、さっき帰っていった配達員とは別の人のようだった。

ようだった、としか言えないのは顔が見えなかったからだ。運送会社の制服を着ているので配達員だとは思うのだが、帽子のせいで顔が全く見えない。しかも、帽子のせいだけとは思えないほどの黒い影が顔全体に広がっていて、表情も一切わからない。

さらに不思議なことに、配達員はなにも持っていなかった。両手を力なくだらりと下げている。

なんとも近寄りがたい雰囲気が漂っており、とてもじゃないが声なんてかけられない。どうしたものかと考えていると、配達員はいきなり目を疑う行動に出た。

配達員は右手の人差し指を突き刺すようにして、インターフォンのボタンを乱暴に三回押した。その直後、左手を力強く握りしめると拳の裏で大きくノックを三回。最後に大きな声で「さくら配達です、さくら配達です、さくら配達です」と叫んだ。

呼びかけなんかじゃない。耳にこびりつくような低くてざらざらとした男の声が、マンションの通路に響きわたる。男の声を聞いた瞬間、悪寒が全身を包み込み、思わずおれは目をぎゅっと閉じていた。

一度深呼吸をしてから目を開けて、そっと家のドアの前を再び確認する。

いつの間にか配達員はいなくなっていた。

マンションに階段は一つしかない。エレベーターはないので、配達員はおれの前を通過しなければ移動ができない。できないはずなのに、見渡しても配達員の姿はないし、人の気配すら感じられなかった。念のため手すりから身を乗り出して下を覗いたが、飛び降りたような形跡もない。

不可解な事態に混乱しながらも、おれは家に帰った。その後、再び配達員がやってくることはなかったが、ドアを開ける時に感じた独特な臭いがなかなか鼻腔から消えなかった。これまでにもどこかで嗅いだことがある気がする、あまり好きじゃない臭いだった。

おれはその後も変な配達員と遭遇した。もう、三回目になる。

二回目も同じく配達員に対して嫌がらせをした時で、家に帰ろうとしたらドアの前にい

た。
インターフォンを三回、乱暴なノックを三回、そして「さくら配達です」という呼びかけを三回。
配達員は、ドア越しに家の中を睨(にら)みつけているように見えた。手にはやはり、なにも持っていない。
この配達員は一体なんのために来ているんだろう？　なんてことを考えているうちに、気づけば彼は姿を消していた。
ずっと様子をうかがっていたはずなのに……
おれは狐につままれたような気持ちになった。
ポストを見ると、初めて変な配達員を見た時と同様に、おれの嫌がらせを食らった配達員が入れたであろう不在票が一枚あるだけ。他にお知らせのようなものはなかった。
あとは前回との共通点といえば、家に入る時にまた、例の臭いがしたことだ。湿度を感じる、嫌な臭いだった。
三回目の時は、おれは家にいた。この時は嫌がらせをするつもりはなく、単に間が悪かっただけだ。日曜日の夕方、配達員がやってきた時、ちょうどおれはトイレにこもっていたのだ。インターフォンの音を聞き、大急ぎで用を足して水を流し、慌ててトイレを出た。しかし、時すでに遅し。ドアスコープを覗いたが、外には誰もいなかった。

ドア越しに誰もいない廊下を見ていると、これまでわざと不在にして何度も再配達をさせたことを、ふと思い出した。すると、自分の行いに対する罪悪感が込み上げてきて、おれは申し訳ない気持ちに押しつぶされそうになりながらドアから離れた。
ポストの不在票を回収しなきゃいけないけど、どうも今はそんな気分になれずリビングに戻った。
その時だった。
インターフォンが鳴った。しかも三回連続で。
三回目のインターフォンが鳴った時、背中を冷たい手のひらで触られたような嫌な寒気を覚えた。振り向いてドアを見ていると、インターフォンの音がやむと同時に力強くドアが殴られ、ドア越しに「さくら配達です」という男の声が三回届いた。
動けなかった。金縛りとか、そういう心霊の類(たぐい)のものではない。ただただ怖くて体が動かなくなっていた。
子どもの頃、夜の暗闇が怖かった。ただ漠然と暗い場所が嫌で、夜一人でトイレに行くことができず、よく隣で寝ていた母を起こしたものだった。大人になり、わからないことが減るにつれて暗闇は怖くなくなった。自分でも知らぬ間に怖がりでなくなり、怯えることといえば、前触れもなく降りかかる上司からのハラスメントぐらいになっていた。
そんな自分が今、ドアの向こうにいる配達員に対して恐怖を感じている。

怯えながらもどこか冷静な自分もいて、こんなにもなにかに怯えるなんていつぶりだろう、と考えてもいた。

男がどんな人物なのか気になる。しかし、見てはいけないと本能的に感じた。

恐怖で体が動かなくなったおれは、ドアをただただ見つめていた。おれがドアに近づくことなく固まっていると、ドア越しに男が「三回目」と言うのが聞こえた。その途端、ドアの向こうから気配が消えた。

おれが恐る恐るドアスコープを覗いてみると、外にはもう誰もいなかった。念のためドアを開けて確認したが、マンションの廊下にも配達員の姿はない。

動けない間に冷や汗をかいたらしい、シャツはバケツで水をかぶったみたいに汗でびしょ濡れだった。

恐怖から解放され、ほっとしたのも束の間。家に戻って鍵を閉める時に、不快感を覚える変な臭いが鼻をかすめ、また嫌な気持ちになった。

変な配達員が何者かはわからない。さくら配達に電話で確認してみようと思ったが、「変な配達員がいる」と問い合わせたところで、まともに対応してもらえない気がして連絡できずにいた。それに、わざと荷物を何度も受け取らなかったことに対する罪悪感が一層、問い合わせに対するハードルの高さを上げていた。

変な配達員が言った「三回目」という言葉の正確な意味はわからない。なんとなく、おれが遭遇した回数をカウントしているような気がしているが、今のところ確証はない。

ただ「三回目」という言葉の意味に関係なく、これ以上不在配達をさせるのは危険な気がした。

酒以外にも、おれは服や漫画にカップ麺など、普段から頻繁に通販を利用しているため、配達は週に二、三回してもらっている。変な配達員も気にはなるが、それ以上に頻繁に不在にすると、受け取りの時に文句を言われるんじゃないかと不安も出てきた。

正直なところ、理解不能な存在よりも、人から怒鳴られたり怒られたりするほうがストレスを感じる。

少なくとも二週間は迷惑行為をやめて様子を見たほうがいい、そう思っていた。

思っていたのに、不満だらけの出来事満載の今日、その決意はあっさりと崩れ去った。

イライラとした感情が収まらず、運送会社のトラックを見た途端、足が止まった。このまま急いで家に帰るべきなのはわかっている。そうすれば配達員に迷惑をかけないし荷物も受け取ることができる。でも、それをしてしまうとイライラを抱えたまま寝ることにもなる。

むしゃくしゃしながら布団に潜る自分を思い浮かべると、舌打ちが出た。

おれはマンションの手前の曲がり角に身を潜める。

ドア越しに聞いた「三回目」というカウントは、単にあの配達員がその日、受取人不在

が三度も続いて、つい口に出たというだけだったんじゃないだろうか。戻ってきた理由も手ぶらだった理由も不明だが、きっとそうに違いないと自分に言い聞かせる。
故意にではないが、今までも外出していて不在票を入れられたことはある。それに不在票を入れられたことがある人間は、この町内だけでもかなりいるだろう。おれだけいきなり怒られるなんてことはないはずだ。
運送会社が不在の回数に応じて急にペナルティを科すなんて話は聞いたことがないし、予告なくそんなことを始めるなんてことも考えられない。配達員が個人的になにかしているのかもしれないが、それなら態度が悪い配達員がいるとクレームを入れれば、運送会社側で対応してくれるだろう。
考えれば考えるほど、変な配達員のことは大したことじゃないように思えてきて、気にしていた自分が馬鹿らしくなる。
曲がり角で様子を見ていると、配達員がマンションから出てきた。距離があるので表情までは見えないが、荷物を持ってトラックに戻る姿を見たら、なんだか満たされたような気持ちになった。
何気なくポケットに突っ込んでいたスマートフォンを取り出す。液晶画面を光らせて時間を確認すると、すでに二十時を過ぎていた。
一番遅い時間帯を指定しておいて、配達しに行ったら家主が不在。おれが配達員なら「どうして指定の時間にいない！」と大声で叫びたくなるだろう。
きっとあの配達員も心の中では……なんてことを考えると、ついつい顔がにやけそうになる。我ながら嫌な性格をしているなと思うが、我慢しきれずに少し口角が上がる。
配達員がトラックを発進させるのを確認してから、おれは何事もなかったかのようにマンションに向かって歩きはじめた。
これで今夜も気兼ねなく寝られる。そう思いながら歩いている時だった。
さっきポケットにしまったスマートフォンが小刻みに振動した。
いつもなら気にせず帰宅して、家に入ってから通知内容を確認する。しかし、なぜか今日は今すぐに確認したい、いや、確認しないといけない気がして、ポケットに右手を突っ込んだ。
画面には一件のメッセージの受信が通知されている。
表示すると、見慣れない電話番号からショートメッセージが届いていた。

ご不在の為お荷物を持ち帰りました。こちらにてご確認ください xxx.####.com

「なんだ、スパムかよ」
運送会社名の記載もなく、明らかに不審なＵＲＬを記載したメッセージだった。

以前、一日中家にいた時に同じようなメッセージが届いたことがある。その時は、こんなわかりやすいスパムメッセージに引っかかる奴がいるか？　騙すつもりならもっと工夫すればいいのに、と呆れた。一時期、頻繁にこの手の怪しいメッセージが届いたが、無視しているといつの間にか件数が減っていた。きっと連絡しても無意味だと認定されたのだろう。しかし、ここ最近急にまた増えてきている気がする。こないだ届いたのは確か……受信履歴を消していなかったので、画面をさらさらと流して確認する。ここ一カ月で三回あった。

その時、おれは大きな見落としをしていたことに気がついた。

迷惑メッセージが届いた日は、おそらくおれが荷物を受け取らなかった、あるいは受け取れなかった日で、変な配達員が来た日でもあった。

確証はない。おれはいつもメッセージアプリの通知は見落としがちだ。気がついた時に確認するから、受信してから見るまでに時間が空くこともある。しかし日付の間隔を見ると、変な配達員が来た日と合致する気がするのだ。

メッセージの受信時間と配達員が来た時間、どちらが早かったかまではわからない。でも、この二つにはなにかしらの繋がりがあるように思えた。ということは、今夜これから変な配達員が家に来る可能性がある。

そんな考えに行きついて、溜め息を吐いた。

せっかく気が晴れたのに。重たい気持ちを引きずりながら、ゆっくりと家に向かう。

マンションの階段を三階まで上り切ると、案の定、奴がいた。

ドアの前に立つ、顔が見えない配達員。

あれが誰なのかはわからない。ここ三回の遭遇のことを考えると、人間かどうかも怪しい。でも、これまで通りなら今日も同じ行動を繰り返して、いつの間にか姿を消すのだろう。おれはそう高を括り、壁際に身を寄せた。

怖いと言えば怖い。相手の正体がわからないのだから当然だ。しかし今日は恐怖よりも、せっかく晴れやかな気持ちになっていたのに、それを台なしにされたことに対する苛立ちのほうが大きかった。

だから、配達員がインターフォンを三回、ノックを三回、呼びかけを三回、いつものように繰り返すのをまともに見もせず、スマートフォンでＳＮＳを眺めながら配達員が消えるのを待った。

芸能人の炎上投稿を追っているうちにＳＮＳに見入ってしまい、思ったより長く時間を潰してしまった。慌てて自分の家の前を確認すると、すでに配達員の姿はなくなっていた。

相変わらず不気味だけれど、危害がないなら気にしないでおこう。

おれはスマートフォンに目をやりながら、廊下を歩いた。

家まではもうすぐだ。その時、嫌な臭いが鼻腔をくすぐった。

何度も感じたあの臭い、でも、今日は別の場所でも嗅いだ記憶があった。どこだったっけ？　思わず立ち止まって記憶を遡る。

じっとりとした湿度の高い臭い。考えはじめてから時間にして十秒もかからないうちに、答えに辿りついた。

朝、駅まで走った時に嗅いだ臭い。雨に打たれた、舗装したばかりのアスファルトの臭いだ。

なんの臭いかわかってすっきりとしたのも束の間、むせ返るような生温かくべっとりとした土のような臭いが鼻の奥にへばりつく。吐き気がして、立ちくらみを起こしそうになる。今日は、今までで一番臭いがきつい。

鼻を押さえながら急いで家の前まで走った。左手に抱えたビジネスバッグの中から鍵を探す。

「ご不在の為お荷物を持ち帰りました」

鍵を掴んだ瞬間、右耳に吐息を感じるほどの距離で男の声がした。

ざらざらした、耳障りな声だった。臭いがさらにきつくなる。同時に、背後に人の気配を感じた。

マンションの廊下なんてそれほど幅は広くない。背後ということは、かなりの近さだ。おれは瞬時にそれを理解し、身震いした。

「ご不在の為お荷物を持ち帰りました」

さっき届いたメッセージと一言一句同じ台詞。

男の声が鋭く胸を刺す。物理的にはなにも刺さっていないのに、後ろからなにかで貫かれたような鋭利な痛みに襲われた。思わず足がふらつく。

「ご不在の為お荷物を持ち帰りました」

逃げ出したい。なのに体が言うことを聞かない。おれはただただ男に背を向けたまま立っていた。鍵を開けさえすれば家に逃げ込める。なのにどうしてだか、それすらできずにいる。震える足はその場から一歩も前に出てくれない。嗚咽が廊下に響く。恐怖から込み上げた涙が目から溢れた。

「ご不在の為お荷物を持ち帰りました」

第二章

迷惑メール

It's dangerous if you don't receive your luggage.

四度目の同じフレーズが耳に届く。

それと同時に、おれの後頭部にそっと大きな手が添えられた。手はじっとりと濡れていた。冷蔵庫を開けた時のような、ひんやりした冷たい空気が背中を駆け抜け、全身に鳥肌が立つ。本能が危険を告げるが、同時に、どう足掻いても逃げられないとわかる自分がいる。

体が浮く。浮くと言っても体感で指一本分ぐらい。ほんの少しの高さなのに、この高さがおれを無力化する。痛いほど静かな廊下に通行人の気配はない。

嫌な臭いがさらに強くなり、胃酸が喉を駆け上る。目の前にあるのに、もう帰ることのできない自分の家のドアが涙でどんどん歪んでいく。

後ろから添えられた手に力がこもる。そして慣性の法則に従い、頭の下に力なくだらりとぶら下がる体を置き去りにしながら、顔からドアに向かって力強く叩きつけられる。

高速で近づいてくる鉄のドア。ああ、ぶつかる。と考える間もなかった。

頭が破裂する音の鳴りはじめが耳に届いた。

木製のローテーブルに置いたスマートフォンが短く振動して、メッセージの受信を告げる。

知らない電話番号からのショートメッセージ。荷物を届けに来た配達員を装った内容だが、よく読むまでもなく迷惑メールであることは一目瞭然だ。

ＵＲＬがまずおかしい。不自然なアルファベットの羅列にしか見えないし、メッセージには運送会社の名前らしきものも入っていない。せめて嘘でもいいから社名を載せろよと思う。

そもそも私は今日、朝からずっと家にいて、インターフォンは一度も鳴っていなかった。なのに『ご不在の為お荷物を持ち帰りました』、なんてメッセージを送られても、焦りすらしない。

「家にいる時にこんなメッセージ送られても、ねえ……」

私はつい呆れて、思わず大きな独り言が出た。ワンルームマンションの狭い部屋の中、テレビの音に紛れて私の声が虚しく響く。

六月最後の土曜日の昼下がり。外では夏らしさを纏いはじめた太陽がぎらりと地上を照

テキストメッセージ・SMS
6 月 27 日 14:17

『６月２７日１４時１７分ご不在の為お荷物を持ち帰りました。こちらにてご確認くださいｘｘｘ．＃＃＃＃．ｃｏｍ』

らしている。日差しがきつく、外出時には紫外線対策が必須だけれど、家の中にいればまだ涼しい季節でもある。

絶好のお出かけ日和。でも、インドア派の私は平日に録画しておいたドラマをぼんやり見ながら怠惰な休日を過ごしていた。仕事で疲れた体をこれ以上酷使するなんて、私にはとてもできやしない。

特に集中することもなく、ありきたりなラブコメを流し見していると、テーブルの上のスマートフォンが震えた。なにかなーと思って見たら、迷惑メールだったのだ。

ここ最近、変なメールがたまに届く。この間までは昼夜問わず毎日毎日大量に届いていたけど、メールアドレスを変更してからはかなり件数が減った。減ったとはいえゼロじゃないので、地味にストレスが溜まるのだ。

たくさん届いた迷惑メールには、たまにきらりとセンスが光る内容のものがあったけれど、基本的にはどれもこれもレベルが低く、ふざけた内容のものばかり。

こんなメールで本気で人を騙せると思ってるの？　と送り主に聞いてやりたくなる。

そんな馬鹿みたいなメールだけど、送信者によって癖があるのか、文面に傾向を感じる。

たとえば、アイドルや芸能人の名を騙り、

『身近に相談できる人がいなくて困ってるんだ……』

『もしよかったら直接会って話を聞いてくれませんか？』

『誰かに話を聞いてもらいたくて……』

みたいな相談に乗ってほしい系の内容。もしくは『〇〇さん、お疲れ様です！　こないだの収録、本当にありがとうございました！』といった、タレントが送り先を間違えたかのように見せかけたもの。はっきり言って人を騙すための文章としては0点のやつだ。相談相手が欲しいからって一般人にいきなりメッセージを送りつける芸能人がどこの世界にいるのよ。

妙に腹が立つのが、『収録』の二文字を『配信』に変えただけのものがここ最近増えてきたことだ。WEBの動画配信サイトを意識しているのだろうけれど、今さらそんなもの意識しても遅すぎるでしょ。あと、レベルの低い迷惑メールのくせに妙なところで向上心を見せてくるあたりが、なんだか余計に腹が立つ。

次に、

『副業で月収二十万円目指しませんか？』

『抽選に当たりました！　あなたにクーポンを差し上げます！』

『社長命令！　至急確認されたし』

といった怪しさ満載の件名のメール。有名人を騙るメールもひどいが、こっちはさらにお粗末すぎて比較にもならない。このタイプのメール送信者に対して思うことはたった一つ。うざい。

「くだらないメールを送るぐらいなら、もっとマシな仕事しなよ。こんな馬鹿丸出しの文章を書いて恥ずかしくないの？」と胸ぐらを掴んでやりたくなる。レベルが低すぎて本気で人を騙そうという姿勢が感じられないし、作業的に送っているのが丸わかりだ。どんな奴がメールを書いているのか顔が見てみたい。いや、冗談だ。どんな奴が書いているかなんてどうでもいい。というか、こんなくだらないことをしている奴の顔なんて見たくもない。

最後に、こっちは唯一レベルが高いと感じたタイプ。

『ご利用いただいている動画配信サービスの月額利用料金が振り込まれておりません。至急こちらのメールアドレスに返信してください』

『購入されたお品物の代金が未払いとなっております。こちらのＵＲＬから再度クレジットカードを登録してください』

『お客様のお支払い方法が承認されませんでした。お支払方法に問題があり、特典をご利用いただけない状況です』

届いた瞬間、「あれ、なにか利用してたっけ？」と心当たりを探してしまいたくなるような内容だ。騙すための文章としては少し洗練された雰囲気を感じる。

こっちのタイプは前の二つよりもたちが悪い。ご丁寧に大手通販サイトのロゴ、サイト名、本物のサイトに似たＵＲＬが記載されていることもある。

初めて見た時は迷惑メールだと思わず、かなり焦った。でも、もしかしたらと思い、念のためメールの文面をコピーして検索した結果、詐欺だと気づくことができた。

調べて知ったけど、このタイプのメールにはかなり大勢の人が騙されているらしい。確かに騙そうとする意欲を感じるし、迷惑メールはもうこんなレベルまで来たのかと素直に感心すらした。でも、しょせん迷惑メールだ。文字通り迷惑極まりないし、考えた人には殺意すら湧く。

まあ、もう兎にも角にも迷惑メールはとってもうざったい。こんなくだらないことをする奴なんて、とことん不幸になって、絶望しながら苦しみ喘ぐことを切に願う。

迷惑メールが届くようになった原因に心当たりがないわけではない。むしろ、大アリだった。

先月、私はある婚活サイトにアカウントを作った。というより作らされた。本当は全く興味がなかったのに……

■■■－□□□□

彼氏が途切れてもうすぐ八年。いわゆる結婚適齢期を過ぎた私は、結婚というものを完全に諦めていた。

いつからだろう？　合コンや街コンといったものに参加するのが億劫になったのは。以前は好きだった恋愛話には会社でもプライベートでも距離を置くようになり、年下の友達や女性社員たちとの会話に入りにくさを感じるようになった。

若い頃、いや正しくは二十代前半の頃は真っ白なウエディングドレスに憧れを抱いていたし、いずれ着る日がくるのだろうと思っていた。それが三十を過ぎた頃には「真っ白のドレスはちょっときつい」と思うようになり、さらに月日が流れると、「色に関係なくきついかも……」と思いを改めた。こうして私の中の憧れは、悲しい諦めに変わっていった。

恋愛に対して消極的になりはじめた頃は、「このままで本当にいいの？」と、私自身不安に思うこともあった。けれど幸か不幸か、時間の流れがその焦りを取り除いてくれたらしく、今ではなんとも思わなくなった。

そりゃあ、子どもが欲しいと思うことはある。同世代のＳＮＳの投稿なんかを見ると、妻として、母としての日常を投稿する彼女たちに引け目を感じることがないとは決して言い切れない。女性の社会進出が進んだとはいえ、女は子どもを産むもんだという圧はゼロじゃないし、なんならまだまだかなり強く残っている。

でも、四十代に突入してからだろうか。今の自分に対して引け目を感じることも、社会からの圧を辛く思う回数も減った。「そういうのに縁がなかった、ただそれだけ」、と徐々に考えるようになり、それに伴い、あまりくよくよ考えなくなっていった。

考え方を変えたことで恋愛関係によるストレスからある程度解き放たれた私は、自由気ままに独身生活を満喫している。働いて、貯金して、たまに贅沢をする。美味しいものを食べたり、旅行をしたりして、自分のやりたいことをやる。それからちゃんと老後資金を積み立てて、歳を取ったら施設に入って穏やかな最期を迎える。ファイナンシャルプランナーに相談して必要経費を算出し、しっかり今後のライフプランも立てた。

今の生活に不満はない。結婚はできないし子どももいないけど、最高まではいかなくても、そこそこいい人生だと思って過ごしている。

それなのに、それを許さない存在がいた。私の母である。

「私ももう若くないのよ。早く孫の顔を見せろとまでは言わないけど、せめて娘の花嫁姿ぐらいは見てから死にたいわ」

私が結婚を諦めたと伝えた時は「聞きたくない」と言って現実逃避し、それ以降、私の諦めた発言をなかったことにして、耳にタコができるほど投げつけてきた言葉だ。

一カ月前、五月最後の日曜日。昼近くまで惰眠をむさぼっていた私は、突然インターフォンの連打によって叩き起こされた。

最初は無視してやりすごそうかと思った。でも、あまりに何度も何度も鳴らされるので我慢ができなくなり、重たい体を無理やり動かして、壁に設置されたインターフォンのモ

ニターに向かった。
朝からこんな迷惑行為をしてくるのはどんな奴だ？　せっかくだから面を拝んでやるか、なんて考えながら、頭をかきつつゆっくり歩く。すると、「あんた！　いつまで親を外で待たせる気なの？」と怒鳴り声がドア越しに聞こえた。
モニターを確認するまでもなかった。私は一度舌打ちをしてから、そのまま玄関に向かう。苛立ちのせいで乱暴な足音が廊下に響いた。
万が一、まあそんなことなんて百パーセントないとは思うけれど、ドアの外にいるのが知らない人だったら困ると思い、念のためドアスコープを覗く。するとドアスコープ越しに、なんとかこちらを覗き込もうと顔を近づける母のどアップの顔が見えた。
そう、私の大嫌いな母の顔が。
母が家に来るなんて……せっかくの休日が最悪の時間に早変わりした。
「近所迷惑だから静かにして」
ドアを開けると、思わず鼻を押さえたくなるほどきつい柔軟剤の香りが私を襲う。臭いに怯む私を気に留めることなく、母は私をずいっと押しのけて家の中に入ってきた。
「ちょっとその顔、寝起き？　いい歳した大人がいつまで寝てるのよ」
「いいじゃない休みなんだから」
「なに言ってんの。そんなんだから彼氏ができないんじゃないの？」

口を開いて一言目が小言。どうしてこんな女が私の母なんだろうとげんなりする。前から好きではなかったけれど、老いとともに嫌味な性格が強まってきているように感じる。会うたびに小言が増え、不愉快な思いをさせられることも増えた。
「余計なお世話。そんなこと言うためにわざわざ来たの？　用が済んだなら帰ってよ。私は仕事で疲れてるの」
「はいはい、会社初の女性部長様はお仕事がお忙しそうですねー」
帰る気はさらさらないのだろう。母はするりと靴を脱ぎ、嫌味な台詞を吐き散らしながらずかずかとリビングへ向かう。仕方がないので溜め息を吐きながら母の後を追うと、「うわ、なによこれ、掃除してないでしょ！」というありがたい感想が前から飛んできた。
春らしい明るいベージュのジャケットに真っ白なショートヘア。それなりに服装にこだわりがあり、化粧もしている。見た目は大人しそうなのに、どうしてこうも中身が残念なんだろう。歳をとっても私はこんなふうにはなりたくない、絶対に。
「別にいいでしょう、私しか住んでないんだから。ほっといてよ」
私がそう言いながらリビングに入ると、母はジャケットを脱いで小さなリビングテーブルの横にちょこんと座った。
「いいわけないわよ。こんなんじゃ良い男がいても呼べないじゃない。それにあんた、あのポストはなに？　いくらなんでも汚すぎるでしょ」

「ポスト？　……ああ、すぐチラシが溜まるのよ」
そうか、あれを見たのか。面倒なものを見られてしまった。さっさと片づけておけばよかった、と少し後悔する。
「溜まるってレベルじゃないでしょう！　あんたのポストだけもう……ぎっしりチラシが詰め込まれてて、びっくりしたわよ。もしかして、嫌がらせでも受けてるんじゃないの？」
「……なにそれ、そんなわけないじゃない」
「本当？　あんた、子どもの頃から変な人に目をつけられやすかったじゃない」
「そんなんじゃないってば。単に私がずぼらなだけ」
母の発言を否定しながらも、私はざらりとした心地の悪さを感じていた。
この人はいつもそうだ。女の……いや、親の勘というものだろうか。変なところで鋭い。それもまた、子どもの頃から嫌いな母の要素の一つだった。
子どもの頃から、私は悪いほうに引きが強かった。クラスのいじめっ子に目をつけられたり、変質者に狙われたり、気持ち悪い男に好意を寄せられたり……そうしたことで苦労させられたのは、一度や二度では済まない。
母のほうはそういうタイプではないようだったけれど、私がなにかを引き寄せると、すぐにそれを察知して話しかけてきた。
ちゃんと私を見てくれている、という点ではいいのかもしれない。けれど必ず余計な一言がついてくるし、私の意見は滅多に聞かないので、正直ほっといてくれとも思っていた。
そんな母の勘は、いまだに衰えていないらしい。
そう、私は今、嫌がらせを受けている。

嫌がらせ。それはなんの前触れもなく、ある日突然発生した。
仕事帰りだったか、土日に出かけた帰りだったかは、もう覚えてない。夕暮れ時、マンションに帰ってきてエントランス横にあるポストを見ると、私の部屋のポストだけ何十枚ものチラシが詰まっていた。
詰め込まれたチラシはどれもぐしゃぐしゃ……ではなかった。一見、汚れている様子もなく、綺麗……と言うと変だけれど、新しいもののようだった。
ポストへの入れ方にも乱雑さは感じられない。できるだけ綺麗に束ねたチラシを丁寧に入れ続け、容量オーバーでうまく入り切らなかった分がバランス悪く投函口からはみ出している、そんな感じ。
投函口からはみ出たものの何枚かが滑り落ちて床に散らばっているが、それすらも等間隔に、人為的に配置されているように見える。チラシが不自然に詰まっているだけでも気持ち悪いのに、それがさらに気持ち悪さを増幅させた。
最初見た時、ＴＶドラマみたいだなと思った。でも、ドラマで描かれるようなストーカー

被害のシーンは、もっと暴力的で破壊的で衝動的なものだった気がする。
そういうわかりやすく怖そうな雰囲気があるから怖いんだろうと思っていたけど、なかったらなかったで怖いと知った。頭の中ではそんなふうに冷静に考察している一方、現実味のない光景を目の前にして、私は体を動かせなくなっていた。
なにも見なかったことにして、このまま立ち去ろうか。そんな衝動に駆られる。でも、どこからどう見ても私のポストが嫌がらせを受けているのは明白だし、ポストから溢れたチラシがマンションの共用エリアを汚しているのに、放置して立ち去るのも心苦しい。
悩んだ結果、同じマンションの人に変な目で見られるのは嫌だという気持ちが勝った。
私は落ちていた分も含めてチラシを全て持ち帰り、まとめて捨てることにした。
ポストはエントランスのすぐ近くにあるので、外出する時には必ず目に入る。朝に家を出た時にはなかったはずなので、犯行は私が外出している間の出来事ということになる。
床に落ちたチラシを束ねていると、なんとなく引っかかりを感じた。最初はなんだかわからなかったけれど、束ねたチラシをぺらぺらとめくっていくうちに、違和感の正体に気がついた。詰め込まれていたチラシには共通点があった。どれも、同じサイズなのだ。
全てＡ４サイズの一枚もので、カラーやモノクロ、多少の厚みの違いはあれど、それ以外のサイズのものはなかった。そして落ちていたものにもポストの中に入っていたものにも、破れや汚れ、引き裂かれた跡はなく、あるのは突っ込む時にできたと思われる少しの

シワぐらいだった。
チラシの内容は成績アップを謳う学習塾に、不動産販売。ブランド品買取に、整骨院、ポスティングスタッフ募集など。広告主はバラバラだけど、どの事業所も徒歩圏内にあるものばかりだった。
何枚もダブっているものもあるので、ポスティングスタッフのいたずらか、もしくは配るのが面倒になって突っ込んだだけなのかもしれない。でも、もしそうならどうして私のポストだけが被害に？　周りのポストを見ても、他にいたずらをされた形跡はない。
もしかしたら、他にもやられた人がいたけれど自分の分だけ片づけたのかも。もしそうなら、私のポストも一緒に片づけてくれたらよかったのに……
あくまでも仮定の話だというのに、存在するかどうかもわからない人に悪態をつきたくなる。私は溜め息を一つ吐いて、チラシを再び束ねはじめた。
「でも、私でもそうするか……」
チラシを集め終えた時に、はたと気づく。もし自分と自分以外の誰かのポストがチラシで溢れていたら、私は二人分のポストを綺麗にできるだろうか？　答えはＮＯだ。おそらくかなり悩んで、自分のポストだけ綺麗にして立ち去るだろう。だってこんな状況は誰にも見られたくないし、私が犯人だと疑われたら、たまったもんじゃない。
警察には相談しなかった。一回だけのいたずらかもしれないし、相談して余計に話が面

倒になっても困る。
チラシを詰め込んだ犯人は一体誰だろう？　犯人に心当たりはない。身近なところから浅い知り合いに至るまで候補になりそうな人たちを片っ端から考えてみたら、誰も怪しくないし誰もが怪しく思えてならなかった。
何度も何度も考えたけれど答えは出ず、ストレスが溜まる一方だった。
だから、チラシが詰め込まれてから一週間後に犯人探しをやめた。これ以上一人でぐるぐる考えたところでわかるはずがないと気がついたからだ。
時間を無駄にしたなあと思う。だから、こんな気味が悪いことはさっさと忘れてしまおうと思った。しかし、事はそんなに甘くなかった。犯人探しをやめて一週間ほど経った頃、またチラシが押し込まれたのだ。
二度目の日のことはよく覚えている。仕事帰りにマンションのポスト近くに差しかかった時、「うわ、なにこれ……」と呟く男の声が聞こえた。どうかしたのかと思いながら近づくと、大量のチラシで溢れ返るポストを気味悪そうに見る若い男が立っていた。
チラシが溢れていたのは、もちろん私のポストだ。
男が私の気配に気づいて振り返ったので、彼が隣の部屋に住む男子大学生だとわかった。眼鏡にかかる少し長い前髪のせいで根暗そうな印象の彼は、私の顔を見て一瞬顔を引き攣らせた後、「こんばんは」とだけ言ってそそくさと部屋のほうへ歩いていった。もともと

あまり良い印象ではなかったが、私の中で彼の印象はさらに悪くなった。
「一体誰、こんなくだらないことする奴は」
私は思わず苛立ち、声を荒らげながら乱暴にポストからチラシを引き抜く。それから床に落ちていた分もぐしゃぐしゃに握りつぶしながら、全て回収して家へ帰った。
相変わらず犯人の心当たりはなく、正体不明の存在に沸々と苛立つばかりだった。

二回目の被害の後、思いきって近所の交番に行って相談してみた。しかし、「お姉さん美人だから、どうせ元カレとかじゃないですか？　心配なら今の男にでも家に泊まってもらったらどうでしょう。聞いた感じ大きな被害も出てないようだし、もう少し様子を見てください」とへらへらした若い警官に雑にあしらわれた。
私は頭に血が上るのを感じながらも、「そうですか、ありがとうございます」と吐き捨ててその場を後にした。警察は頼りにならない、といった話はよく耳にするが、まさかここまで使えないとは思っていなかった。あまりにも腹が立ったので、もう警察には頼らないと決めた。
そもそも、大きな被害が出てから動いたんじゃ手遅れだろう。あの警官、自分がなにを言っているか理解できているのだろうか？　この税金泥棒が。ぐらい言いたかったが、言えなかった。こんなところに相談に来た私が馬鹿なんだろう。あの人だけがこうなのかも

しれないが、もう一度日を改めて相談しようという気力なんて残っていなかった。
帰り道、私は交番での出来事をＳＮＳで晒してやろうかとも考えた。でも、もし投稿がバズって炎上し、あの警官だけでなく私まで身元を特定されて迷惑行為が増えたらどうしよう……そんな不安が頭を過る。
フォロワーなんてほとんどいない、細々と他人の投稿を見るぐらいにしか使っていない寂しい私のアカウント。だけれど、なにがきっかけで炎上するかわからない昨今、私だって炎上する可能性は決してゼロではない。独身四十路女の炎上なんて目も当てられないし、私は悲しくなるぐらい引きが悪い人間だ。下手なことはしないほうがいい。悩んだ末に私は投稿を踏みとどまった。
あの日以来、交番には行ってない。けれど油断すると「お姉さん美人だから」と警官がへらへら笑う顔が脳裏を過る。美人と言っておけば私が喜ぶとでも思ったんだろうか？ふとそんな考えが頭に浮かび、なんだかまた腹が立ってきた。私の中で黒い感情が湧き上がる。

「ねえ。ねえ、ちょっと……聞いてるの？」
母の声で我に返った。母は怪訝そうな顔で私を見ている。
「本当に大丈夫なんでしょうね？」

「大丈夫大丈夫、子どものいたずらだって。最近近所でよく起きてるみたい」
「本当なの、それ？」
「本当だって。少し前に回覧板で回ってたんだから。お母さん、帰りにでも掃除して捨てておいてよ」
私はふと思いついた嘘を言って、その場をなんとか誤魔化した。「嫌よ。なんで私がチラシ集めて捨てなきゃいけないの」と母は心底嫌そうな顔をして、首を横に振った。
「誰が触ってるかもわからないのに」
ぽつりとこぼれた母の言葉を聞いて、なぜか胸がざわりとした。
その後も母はくどくどと、家事をちゃんとしろ、身なりに気をつけろ、近所の誰某さんのところは二人目の孫が生まれた。誰某さんのところは孫が小学校に入学した、などと壊れたラジオのように話し続ける。途中で面倒になってリアクションを放棄したが、母は気づいていないのかずっと話し続けていた。
二十分ほど無意味な話を続けると満足したのか、母は「そろそろ行かなきゃ、これからちょっと用事があるの。それじゃまた来るわね」と言って帰る素振りを見せた。「もう来なくていい」という言葉が喉元までせり上がったが、ここで余計なことを言ってまた小言が始まってはたまらないので、ぐっと下に押し戻す。
しかし、見送りに玄関までついていくと母が急に立ち止まり、「そうだ、肝心なことを

忘れてた。このサイト登録してみなさいよ！」と顔を輝かせながら振り向いた。
「登録？」
私は首をかしげる。
「婚活サイト。登録は無料でできるそうよ。運営がしっかりしてて、サクラもいないから安心なんですって」
母は玄関まで来たのに靴も履かず、黒いレザーのハンドバッグからごそごそとスマートフォンを取り出した。危ない危ない忘れるところだったわ、なんて言いながらスマートフォンの画面を見せつける。そこには聞き馴染みのない名前の婚活サイトの紹介ページが表示されていた。
「なによいきなり。面倒くさいことは嫌なんだけど。それに、こんなサイト聞いたことないけど」
「大丈夫よ！　近所の佐々木さん覚えてるでしょう？　佐々木さんのとこの息子さんも四十代だけど、このサイトで結婚できたんだって」
「はぁ……」
「騙されたと思って一回やってみなさいよ。ダメでもともと、良い出会いがあったら儲けものじゃないの。ね？　ものは試し、登録だけでもしてみなさいって」
母はそこから動こうとせず、私が断っても全く諦める気配がない。この後予定あるんでしょ、と言っても「いいのいいの！」と笑うばかりの母に早く帰ってほしくて、渋々その場で婚活サイトに登録した。母は私が登録するのを見届けると「なにか進展があったら教えてね」と言って嬉しそうに帰っていった。
嵐のような一時だった。
私はただ茫然と閉まったドアを見つめていた。あんな無神経な人の血が私にも流れているのかと思うと悪寒が走る。
溜め息を吐いてから、リビングに戻った。室内には柔軟剤と思われる母の残り香がして、気持ちがさらに下がった。スマートフォンに目を落とすと、そんな私の気持ちとは裏腹に明るい婚活サイトの画面が表示されている。
リビングに深い溜め息が広がる。
この歳になってこんなことを考えるのもなんだが、あんな大人にはなりたくないなと改めて思った。
母が帰ってから、登録したサイトで何人かの男性のプロフィールを見てみた。せっかくなのでメッセージのやり取りをしてみようかと思ったが、メッセージを送るには有料会員になる必要があるとわかり、やめた。無料なのはプロフィール登録までだったようだ。登録しかできないなら意味がないじゃないか。

そもそも私はもう、結婚を諦めているのだ。今さら異性を気遣ったり、好かれるための努力をしたりなど、する意味がわからない。なのに、その前の段階へ辿りつくために料金まで払わないといけないだなんて、私には耐えられない。

私は悩むことなくその日のうちに婚活サイトから退会することにした。婚活に時間を費やすぐらいなら、録画したドラマを眺めていたほうが私にとって絶対に有意義なのだ。

退会手続き完了とともにスマートフォンをテーブルに置いてテレビをつけた。もちろんドラマを見るために。

この次の日からだ、迷惑メールが届きはじめたのは。

最初は珍しいなと思った。迷惑メールなんてこれまで届いても一カ月に一通、なんなら一通も届かない月のほうが多いぐらいだったのに、突然一日に五通も届いたのだ。内容もふざけたもので、国民的人気を誇る五人組男性アイドルグループのメンバーの名を騙るものだった。しかもその五人のうち四人の名前でそれぞれ送られてきたのである。

メールの内容は『グループで活動を続けるのが辛い』『他のメンバーとの温度差を感じる』『周りに相談できる人がいない』『話を聞いてほしい』といったものだった。五人中四人がやめたがっているアイドルグループっておかしすぎるだろう。もしこれが真実なら、その状況で続けようとしている残り一人には同情を禁じえない。

衝動的に『もう解散したら？』と送ってやろうかと思ったけど、やめておいた。そんなことをしたところで私の返信は誰の心に残ることもなく、スルーされて終わりだ。

今時いたずらにしてもレベルが低いなあと思いながらも、その日は届いたメールを開封だけしてそのまま無視することにした。

しかし、今思えば五通なんてかわいい数だった。翌日には迷惑メールの受信数が十通となり、そのまた翌日は二十通を超えた。ここまで来るといくら鈍感な私でもさすがに気がついた。自分の個人情報が流出しているということに。

私は登録したその日のうちに婚活サイトを退会した。しかし一度登録した以上、そこからなんらかのかたちで流出してもおかしくはない。

無料登録をしたのみだったので、クレジットカードの情報は入力していなかった。本当に課金してなくてよかったと思う。不幸中の幸いだ。

はじめは迷惑メールが届くたびに送信アドレスを受信拒否していたが、すぐに無駄な努力だと思い知らされた。拒否しても拒否しても、どんどん新しいアドレスからメールが届くため、焼け石に水だったからだ。

メールアドレスの変更も考えたが、クレジットカードや通販サイト、電気やガスに水道といった公共サービスなどなど、色んなところに登録しているアドレスを変更するとなるとかなり骨が折れる。どこに登録したか、全て覚えている自信もないし、一緒に登録した

パスワードも記憶が怪しい。
二分ほど悩んだ後、私はしばらく様子を見ることにした。放っておけばそのうち減るかもしれない、そんな淡い期待を胸に、現実から目を背けた。
現実逃避の結果、一日に届く迷惑メールは五十通を超えるようになり、メールが届きはじめて二週間が経つ頃には感覚が麻痺していた。受信ボックスの異常な数字を見ても、もうなにも気にならない。
四十通を超えたあたりから、もはや迷惑メールに対するストレスは減り、受信に気がついたらその都度削除するのが新たな習慣になった。慣れとは怖いもので、いつの間にかなにも考えずに受信フォルダを確認して、迷惑メールがあれば消すのが日常になっていた。
アドレス変更は手間だし、もうこのままでいいや……と思っていたが。
そんな矢先、考えが変わる出来事があった。

「ごめんね。こないだ登録してもらった婚活サイト、間違えてたみたい」
仕事帰り、最寄り駅から家に向かって歩いていると母から電話がかかってきた。着信画面を見た時は無視しようと思ったが、一分ほど無視しても切れる気配がなかったので、根負けした私はしぶしぶ電話に出たのだ。
電話の向こうから届いた母の第一声は、謝罪の言葉だった。

「間違いって、どういうこと？」
「いや、あの、ちゃんと教えてもらったつもりだったんだけどね、こないだのあのサイト、名前間違えてたみたいなの。ごめんなさいね。それで正しいサイトの名前は……」
私はそこまで聞いてカッと頭に血が上り、黙って電話を切った。
そのまま早歩きで家に帰り、着替えも手洗いもせずにリビングのテーブルの前に座ると、無我夢中でにメールアドレスを変更した。なんだかよくわからないけれど、母のせいで変なメールがこれ以上届くというのが耐えられなかった。
一心不乱にアドレスの変更作業をして一区切りついたところで、私の中でプツンとなにかが切れた。その後の記憶はないけれど、気がつくと私はリビングのテーブルに突っ伏していた。寝落ちしていたらしい。時計を見ると日付はとうの昔に変わっており、寝違えたのか首が痛い。明日も仕事なのに……深夜、一人暮らしの部屋に舌打ちが響く。
メールアドレスを変更したら、当然ながらパタリと迷惑メールが途切れた。
久しぶりに訪れた平穏。そうか、迷惑メールが来ないだけでメールの受信数ってこんなに変わるのか。メールの削除も日課になっていたし、ストレスなんてもう感じないと思っていた。でも、迷惑メールが途切れた途端、心の中の滞りがするりと流れて気分が晴れていた。
悪いことが続く時は続くと聞くが、良いことも続く時は続くらしい。いや、これは気の

立ち読みサンプル
はここまで

持ちようかもしれないけれど、迷惑メールが途切れてから色んなことが良い方向に向かっている……ような気がする。

まず、仕事のトラブル発生率が下がった。会社の業績が少し上がったから、その分ボーナスが雀の涙ほど増えた。残業が以前と比べると減り、ある程度体力を残せるようになってきた。帰ってから自炊をする時間的な余裕も生まれ、食生活が改善された。

一つ一つは小さな変化だけど、合算すると大きな変化が私の生活に起きている。

どれも迷惑メールと関係ないことばかり。でも、タイミングがアドレス変更と同時だったから、つい関連を見出してしまう。

これなら、さっさとアドレスを変えておけばよかった。

そんなことを考えていた矢先のことだった。

ご不在の為お荷物を持ち帰りました。こちらにてご確認ください xxx.####.com

一通の迷惑メールが届いた。

盲点だった。メールアドレスを変えたら迷惑メールは一切届かなくなる、そう思っていた。しかし電話番号経由のメッセージは、アドレスの変更と全く関係ないのだ。

受信履歴を見ると、不在配達を装った迷惑メールは他のメールと異なり、どれもショートメッセージだった。思い返してみれば迷惑メールが殺到するよりも前、たまに届いていた迷惑メールはどれもショートメッセージだった……ような気がする。

「これは……防ぎ切れないな……」

ショートメッセージでやってくる迷惑メールから逃れるには、電話番号を変えるしかない。それはメールアドレスの変更の比ではないほど面倒だ。そもそも情報の流出元がわからない以上、変えたところで逃げ切れないかもしれない。

完全に迷惑メールから解放されたと思っていただけに、ぬか喜びだったとわかった私は地味に心にダメージを負った。

改めて、不在配達に関する迷惑メールの内容を確認してみる。文面は、

『先程配達に行きました、不在のため荷物保管しています』

『お届けに行きましたがご不在でした』

『お客様不在のため、荷物を持ち帰りました』

など、若干日本語が怪しい。言い回しに変化はあるけれど、基本的に書かれている内容は同じ。あとは記載されているＵＲＬの文字の羅列が異なるぐらいだった。

アドレスを変更したことにより、迷惑メールの件数は格段に減った。なんならほぼゼロと言っても過言ではない。現状ショートメッセージは普段あまり使わないし、迷惑メール